

ソースティン・ヴェブレン

1 この講義のポイント

- ・ 「自分の意志」で話しているつもりでも、いつの間にか誰かの言葉のまねになっていることはないだろうか？
- ・ 資本主義社会の中での個人の意志という問題を、「制度」という視点から考えてみよう。
- ・ 19 世紀に流行した社会進化論が、現代の自分たちの考え方の中にどれほど根付いているかを確認してみよう。

2 Thorstein Bunde Veblen

- ・ ノルウェーからの移民の子供として、アメリカに生まれる。
- ・ グスタフ・シュモラーらと交流し、スペンサーの進化論に影響を受ける。
- ・ 『有閑階級論』（1899 年）、『企業の理論』（1904 年）等多数の著作がある。

3 ヴェブレンの生きた時代のアメリカ

1861 年 リンカーン大統領に就任，南北戦争勃発
1863 年 奴隷解放令
1869 年 大陸横断鉄道完成
1879 年 エジソン，白熱電灯発明
1890 年 フロンティア消滅
1911 年 独占禁止法によりユダヤ系石油会社スタンダード解体。
1817 年 アメリカ第一次世界大戦に参戦
1929年 ウォール街で株が暴落，大不況へ

社会の急速な転換期

- ・ 開拓期から本格的な資本主義社会の台頭へ
→大規模独占企業の登場
ex. ロックフェラー，カーネギー
- ・ 「古き良き時代」から「黄金狂時代」へ
- ・ 電灯が点り，自動車が走り回る時代へ

4. 大量消費社会による経済成長

5 移民の流入と民族差別

- ・ イタリア系、東欧系移民の増加
- ・ WASP(White Anglo-Saxon and Protestant)優位性の誇示
- ・ ヴェブレンの両親もまたノルウェーからの移民であった。

6 女性の急速な社会進出

(1) 工場労働の発達による女性の職種の拡大

19 世紀中盤までは、女性労働は主に教師か、家政婦であった。

ex. タイピスト、秘書、新聞記者、デパートの店員、看護婦等

第二次世界大戦頃には労働者不足を反映して工場労働者も増える。

(2) 女性の権利獲得運動の進展

Margaret Sanger (1897-1966)：看護婦、女性の健康保護の観点から避妊、中絶の合法化を主張。

Jeanette Rankin (1880-1973)：慈善活動化、女性の参政権獲得運動のために活動。

Jane Adams (1860-1935)：慈善活動化、女性の参政権獲得運動のために活動、「平和と自由のための国際女性連盟」初代会長。アメリカ人女性初のノーベル平和賞受賞者(1931 年)。

Alice Paul (1885-1977) 女性の参政権獲得運動のために活動。1920 年、アメリカの選挙制度改正の実質的なリーダーであった。

(3) ライフスタイル、道徳観の変化

- ・ 封建的・従属的な女性像の変化。
- ・ 享乐的な消費文化の中での、中心的な消費主体となっていく。
- ・ 生産性の向上と商品の低価格化、そして労働者所得の上昇が消費の拡大を生み、それがさらに生産の増加につながっていく

(4) 「女性のドレスについて」

女性が美しく着飾り、ドレスや装飾品がどんどん華美になっていくのは、女性自身の趣味ではなく、そのような女性を「所有」できる父や夫の社会的経済的階層を誇示するという文化によるものである。これは男性が女性に直接的に強いているわけではなく、ある時代、場所にはびこる「理想の女性像」という価値観の形成の中に男性中心社会の要素がある。

→思考の習慣

(5) 『有閑階級の理論』の中の女性論

時代と社会の生産力の状態によって、理想とされる女性像が変化する。

原始状態：生産性が低く、女性も働かないと生活が維持できない。

→多産、健康で力強い太めの女性が好まれた。農業労働。

ex. 原始宗教の多くの女神像が、多産と豊穡のシンボルであり、太めの女性として描かれることが多い。

半産業化社会：女性労働に頼らなくても生計の維持が可能。

→あまり経済活動や生活感を漂わせない女性を所有できるということが男性の経済力を誇示することになる。女性は家庭に（といっても、家事労働は召使いが行う）。

高度な産業化社会：社会的な生産性が高くなり非生産的な女性を所有することがそれほど珍しくなくなる。

→高学歴、知識と教養に優れ、洗練された物腰と活動的な女性。不健康なまでの細さはむしろ敬遠される。言い換えれば、「金のかかった女性」の所有が好まれる。

『有閑階級の理論』は、女性を縛るモラルや常識、価値観が、実は男性の支配構造によるものであることを明らかにした。

→ヴェブレンの『有閑階級の理論』は、旧来の男性中心社会を打ち破ろうとしていた女性たちに、非常に好評を博した。

7 「アメリカ的」思考の誕生

プラグマティズム(実用主義)

- ・ パース、ジェームズ、デューイによって確立された。
- ・ ジェームズは実際に使える理屈が真理の基準と考えた。
- ・ 道具主義：知識は物事や事態を効率的に処理するための道具である
→ビジネス・スクールや工学部の設立へつながる

戦後、実績評価主義の結びついて、現代アメリカの基本思想の一つとなる。

8 競争の激化が独占を生む。

- ・ エネルギー産業や金融産業のように規模の経済性が働く産業では、自然独占が進む。
- ・ 競争がある産業でも、過剰競争が過剰投資と低利潤率を生じ、頻繁に不況に陥る（19世紀末を通じて、アメリカは不況が続いている）。

→成功した企業が、経営困難に陥った企業を、次々と吸収・合併、独占、寡占が進む。

□ 貧富の差が、労働運動の活発化を促す。

→大規模なゼネストと軍隊を出動させてまでの弾圧の繰り返し

巨大な独占資本の登場は、人々の反感を買ったにもかかわらず、アメリカ経済の支配力を強めていった。

→ヴェブレンの批判する資本主義社会は、この独占化が進んだ資本主義社会である。
マルクスのように、資本主義が必然的に崩壊するという主張はしない。

9 社会進化論

(1) 社会的ダーウィニズムの広がり

競争の結果を無批判的に受け入れる態度

優れたものが生き残り、劣ったものが淘汰されるのは必然。

→生き残ったものが優れたものであり、淘汰されたものは劣ったものである。

(2) 進歩(Progress)の発明

変化メカニズムである科学的な進化論研究に、価値観や思想を取り込んだ。

「人類社会の進歩は、より良きものへと到達する道程である。」

市場競争、植民地主義、西洋の東洋、白人の黒人、黄人に対する優越といったものを正当化したことがヨーロッパ社会で受け入れられる原因となった。

(3) 優生学の普及

- ・ 優れた人間性の遺伝的決定論と自然淘汰の概念を組み合わせた思想。
- ・ 弱者は劣者であるから保護は不必要とする消極的思想と、弱者の排除、強者の保存という積極的思想の二つがある。
- ・ 極端な形では、ナチスの選民思想に体现したが、考え方自体は世界中に広まり、日本にも1990年代まで優生保護法が存在した。
- ・ 民族主義と結びつき様々な問題と事件を引き起こした。

遺伝的改良によって「よりよき人種」を作り出そうという発想は、19世紀に起源を持つ。

→自分たちの道徳観に合致しないグループは排除してしまうという考え方。

ダーウィンにおいても自然選択と人為選択の区別はない。

19世紀末ぐらいまで、遺伝学派（メンデル学派）とダーウィンの進化論は、対立していたが20世紀初頭に統合学派によって統一される。

実際には「優秀な遺伝子」を先験的に決めることはできないし、むしろ遺伝子の多様性が生物としての生存確率を向上させている。

→遺伝子の中に揺らぎがあるからこそ、生物は進化することができる。

10 ヴェブレンの理論

(1) 進化経済学

スペンサーの進化論に影響を受けながらも、社会的ダーウィニズムとは異なる方向へ。

人の心を構成する二つの本能

「モノ作り本能(Instinct of Workmanship)」：人間生命の存続や増殖に役立つ活動を高く評価し、称賛するような性向

「競争心」(Emulation)：集団内部において地位をめぐる争い、「力の序列」＝社会秩序を習慣的に決めていく。

二つの本能の発現の仕方によって、社会の中の「制度」が作られていく。

I. 未開時代－平和愛好的段階－

- ・ 貧困と平和が支配する時代。
- ・ モノ作りがもっとも評価された時代

II. 野蛮時代－略奪段階－

- ・ 生産性の向上
- ・ 技術の発達

封建時代のように暴力で何かを得ることが賞賛された時代。

III. 半平和愛好的な略奪段階

- ・ 武力による略奪ではなく商才の発揮による準略奪へ

IV. 平和愛好的産業段階

- ・ 所有をめぐるゲームへ
- ・ 有閑階級の形成
- ・ 顕示的消費の登場

「平和愛好的」という言葉は、「他者とは争わない」という意味ではなく、戦争のような軍事行動を伴わないという点に注意。

(2) 有閑階級の理論

顕示的消費

- ・ 財やサービス自体から得られる満足ではなく、消費することによって、自らの社会的に高い地位を示すための消費。
- ・ 女性のドレスは、男性による顕示的消費の一つである。衣装、言葉遣い、テーブルマナー、大学の創立、寄付、慈善事業といったものも含まれる。
- ・ われわれの社会で、「良い」あるいは「善い」と思われている行為や考え方は、実は有閑階級が、競争心を発揮し他の階級との差別化を図るために作り出した「制度」なのである。

有閑階級

成功した独占資本家階級は、日々の生活に追われることがないという意味の有閑階級となる。

→有閑階級の消費は必要のためではなく、顕示するためのものである。

- ・ 現代資本主義社会で彼らが考え出した様々な様式が、人々の思考の規範となっている。
- ・ 有閑階級の行動様式は、往々にして保守的である。

追従集団の形成

有閑階級ほど生活にゆとりが無い階級でも、人々は、有閑階級を基準として序列化を求める(競争心が働くため)。

→人々は、有閑階級の消費を模倣し、顕示的消費に走る。

ex. ブランド品の購入、高級邸宅の様式を真似て住宅を建設するetc.

男性のネクタイ：今では何のためにしているのか誰も知らないが、ネクタイをすることが正装の必須条件（ただし、正装では黒の蝶ネクタイ：ダービー卿が考え出したと言われている）。

このように、有閑階級の作り出した特殊な思考形式が、ある時代の人々の共通の思考の習慣となっていく。

(3) 制度

「制度とは、その時代で支配的な人々の思考の様式である」

→有閑階級の創り出した様々な様式は、人々の考え方 の規範となり、思考自体を支配する。

- ・ 有閑階級は、略奪者としての頂点で生活の苦勞から切り離されているが、追従集団はそうではないので、互いに競争し続けることになる。
- ・ 個々人の意志ではなかなか制度から脱却することができない。
社会の中にルールや常識（価値観、道徳、行為規範etc）として埋め込まれているため。

一方で、制度は社会の基本でもある。

人々は、制度に沿って生きることによって、円滑な社会生活を送ることができる。

- ・ 常識的な思考をすることによって、他者の行動を予測することができる。
- ・ 形式化された様式に則ることによって、一つ一つの選択において理性的な判断を行う必要がない。

(4) ビッグ・ビジネスと株式会社—独占企業がわれわれの社会の文化を創っていく—

- ・ 不景気の中での企業の合併と再編。
- ・ その過程における株式や社債による大規模な資金調達システムの完成

株式会社化ということはどういうことか

株式＝所有権の分散化，市場化

- ・ 経営者と所有者が異なる存在になる。
→経営者は雇われのサラリーマンに過ぎない。

アメリカでは1880 年代ごろから経営者養成のためのビジネススクールが設立されていた。経営者は株主のために、利益を最大化する。

→顧客は利益を上げるための手段の一つに過ぎなくなる。

売り手と買い手、使用者—労働者の関係よりも、経営者と株主の関係の方が重要である。

社債＝引受銀行の監視

企業の評価が資産総額ではなく、将来収益＝予想される配当で決まる。

[1] オーナー企業の場合

所有者の利益改善は、企業の収益力改善によるしかない。

[2] 株式会社の場合

所有者は、

1. 企業収益の改善
2. 他の企業の株式へ買い換え

という二つの方法を採用することができる。

株式への投資家(所有者)は、一つの企業に期待するだけでなく、経済全体の成長にもとづいて利益を上げるようになる。

技術進歩と慢性の不況

- ・ 19 世紀末の経済はデータだけを見ると不況の連続である。しかし、この時期は重化学工業を中心とした経済成長の時期でもあった。
- ・ 激しい価格競争と過剰投資による倒産と失業が見た目の不況の原因
- ・ 投資を効率化してなおかつ競争に生き残るためには、
 - ・ 科学技術を利潤増加に役立つような分野に制限する。
競争心が発揮され、所有と経営の分離が進んだ社会では、モノ作り本能が邪魔になることがある。
 - ・ 宣伝広告を駆使し、販売力(Salesmanship)を高める。

- ・ 技術進歩のコントロール
- ・ 信用創造によるインフレーション
→投資コストを削って、利潤を確保する。
- ・ 価格競争自体を抑える。
→利潤率の低下に繋がるような価格競争を強い市場支配力を利用して制限する。

大衆は、嗜好を企業によってコントロールされるだけの消費者と化してしまう。

政府は、私有財産の擁護を最優先とする「ビジネスの政府」となる。

(5) ガルブレイスの依存効果

「現代市場社会において、人々の欲望は自発的なものではなく、企業の活動によって創られたものである。」

(6) ビジネスの国家

ビジネスの政府の支配する国家

古くからある「愛国心と金銭的連帯」への先祖返り

その国の人々は決して豊かにはなれない。

- 「国境」があるかぎり市場の獲得や貿易摩擦は解消しない。
- 株式会社制度が中心となる限り、人々はビッグ・ビジネスの体制の中に組み込ま

れ、価格維持のための生産制限＝雇用調整政策によって常に失業の危険にさらされる。

➤ 私的所有権の廃止＋国境の消滅→モノ作り本能に基づいた社会へ

※※勉強の指針※※

教科書215-234 頁

Step A 予習のために

1. 217-8 頁 ヴェブレンによる快樂主義（効用学説）の批判を読み、これが現在のミクロ経済学の基礎の批判になっていることを考えてみよう。
2. 218-222 頁 「競争心」と「もの作り本能」の発現バランスによって、歴史的な各段階が規定されていくというヴェブレンの進化論的経済学のイメージを作っておこう
3. 222-228 頁 「ロック」のところでも説明したが、株式会社の特徴を理解し、それが20 世紀に入ってどのような社会的性格を考えてみよう。

Step B 講義中に確認しておくこと

1. 「競争心」と「もの作り本能」がどのような形で発揮されて、歴史の各段階が形成されていくのだろうか？
2. 顕示的消費とは何か、誰が顕示的消費をおこなうのか？そしてそれがどのようにしてわれわれの社会の様々な制度を形作っているのだろうか？
3. 20 世紀に入って、ビッグ・ビジネスの中心となった株式会社の行動はどのような特徴を持つのだろうか。特に技術進歩、価格統制、広告・宣伝という点を考えてみよう。

Step C さらなる勉強のために、考えてみよう

1. 人は制度からどうすれば自由になれるのだろうか？
2. 人のコミュニケーションには決定的な断絶があるが、その断絶故に社会は進歩するということはどういうことなのだろうか？
3. 君たちが大学を卒業し、企業に入って商品を売る立場になったとき、ヴェブレンの言葉はどのように響くのだろうか？